

北海道師範塾 塾頭通信

「教師の道」

第704号 平成26年3月14日

ワジダ (Wadjda)

ワジダは、現在シアターキノで上映されている映画「少女は自転車にのって」の主人公の名前です。この映画は、ワジダという10歳の少女が、「自分も男の子と同じように自転車に乗りたい」という素朴な夢の実現の為に、世の中の不条理と闘うというものです。

日本の少女なら、「女の子は自転車に乗ってはいけません」等と注意する大人はいませんし、「自転車に乗りたい」という夢の実現の為に、世の中と闘う必要などもうとうありません。しかし、ワジダのいる世界は違います。その違いの大きさをどう受け止めるかは人によって違うと思いますが、「少女は自転車にのって」という映画が提起している問題の大きさを、見逃してはならないと思います。

この映画は、ハイファ・アン＝マンスールというサウジアラビア初の女性監督によって製作されました。彼女は、大学卒業後一時石油会社に就職するのですが、男性社会の只中で自分が透明人間になった気分だったそうです。

映画の中で、ワジダの自宅の壁に貼ってある父親の系図にワジダの名前がないというシーンが出て来ます。しかも、ワジダは自分の名前を書いたメモをその系図にピンで留めておくのですが、翌朝にはそのメモは剥ぎ取られ捨てられています。

そのシーンは、女性が一人の人間として扱われていない現状を象徴するものであり、そこにハイファ監督の意図を強く感じさせます。

映画の舞台は、サウジアラビアの首都リヤドです。

ワジダの家は、夫婦共に働いており、映像を見る限り、家は大きく経済的には中流家庭のように見えます。

サウジアラビアでは、女性は自動車の運転が許されておらず、その為にワジダの母親は運転手を雇い、何時間もかけて働きに出ています。



ワジダの母親は夫を愛していますが、男の子がいない為に、夫は第二夫人のもとに行こうとしており、深く悩み、傷付いています。

映像は、ワジダやワジダを巡る家族、また、ワジダの仲間達との生活を淡々と描きながら、近代化し、経済的にも発展し続けようとする一方で、イスラム教という精神世界が壁の様に立ちはだかっているサウジアラビアの現実を痛烈に映し出しています。

「少女は自転車に乗って」という映画は、イスラム教やイスラムの世界を批判している訳ではありません。ただ、息苦しい日々の暮らしを淡々と描く事で、かえって社会が抱える矛盾や苦悩が、我々の胸にもストレートに伝わって来ます。

今、イスラムの世界は、西洋諸国との軋轢の中で原理主義が台頭しているように感じます。ワジダが通う学校の校長先生は子ども達に戒律を徹底して守らせようとしませんが、そうした姿勢にも、原理主義の臭いを強く感じさせます。

私達には、校長先生の姿勢を、遅れているとか、硬直的だと笑う事は出来ないと思います。何故なら、他者を受け入れず、自分だけが正しいと主張して憚らない人種は、この日本においても決して珍しい事ではないからです。

また、映画の中でワジダは校長に隠れているような問題を起こしますが、このシーンは、大人が戒律という形式で子ども達を押さえつけようとしても、子ども達の中に芽生える内発する力を押さえつける事は難しいという現実をも、垣間見せています。

そしてワジダの様な子どもは、他にも沢山いる筈です。アラブの春は、ワジダが一人ぼっちではない事の証左ともいえるでしょう。

今迄当たり前だと思っている事でも、ワジダのように純粋な目で見れば理不尽な事は沢山あると思いますが、気付かない振りをするのが大人になったのだと自分で納得させたりしています。

「今のまま流されていて良いのか」と声なき声で問われ続けている筈なのに、どこかで妥協し、折り合いを付けている自分に気付く時があります。だから、ワジダの自分に妥協しない姿が、私には眩しく感じます。

ワジダが自転車にのって力強くペダルを踏む姿には、どんなに閉塞された状況にあっても、自分の夢を諦めず、信念を持って一歩前に踏み出すべきだ、というハイファ監督の思いが凝縮しています。(塾頭：吉田 洋一)